

## 生は幻

凡夫は、目に見える世界が真実で、夢の状態は真実ではないと信じておるが、一方でブッダは、この世界は夢のような幻想だと捉えていらした。ブッダたちがおっしゃるには、死後の中有では、私たちは「三悪趣は幻想だ」等々の紛らわしい顕現をみることになるであろう、と。すると、「もしこれが真実ではない夢のようなものだとしたら、そんなに悪くはないものだ」と考えてしまう人もいるかもしれないが、それは大変な錯誤というものじゃ。本質は幻想とはいえ、夢が続く限りはその夢は現実として経験されるのじゃから。この生は一場の夢のようなものじゃが、私たちはこの生のカルマが熟して終わりを迎えるまでは真実のものだと感じて、この生という夢から醒めることはないのじゃ。たとえば悪夢をみたら、夢をみている限りはそれを真実として経験するじゃろう。そして、意識的になって目を覚まさないかぎりには夢を見ている。死ぬとき、私たちはこの生という夢から醒めて、この生は曖昧な記憶になっていく。生きている間のものが何もなくなるや否や、気づくともう新たな現実を掴んでいる。それが中有の状態じゃ。

あなたがこの生は夢のようなものだと理解したら、その中のあらゆるもの  
— 幸福も富も宝物も痛みも苦しきも — が無常であり、はかないものだ  
だとわかるじゃろう。すると、違う環境にそれほど圧倒されるということも  
なくなってくる。集中が保たれるようになり、快樂に耽ることに流されるこ  
ともなくなつて、困難な境遇にもそれほど左右されなくなってくるじゃろう。  
私たちの生とは、オイルランプのようなもの。オイルはカルマで、火はこの  
生じゃ。オイルがある限り、火は続く。私たちの生は、この生のカルマが終  
わりを迎えるまで続くものじゃ。そして、心相續に刻み込まれたカルマに支  
配されて、次に進んでいくことになるのじゃ。

(丸山博貴訳)